

生をあらわにする「身振り」

——生命理解に対するハイデガー身体論の射程

高屋敷直広

発表レジュメ

かつて我が国では、「背守り」と呼ばれる独特の風習が行われていた。この風習は、幼児期の死亡率が高かった近世の生活世界に顕著で、子の産着や着物の背に、一種のお守りとして糸を縫い付ける風習である。病気や災害から身体が守られ、「命（生命）」が失われないように、という親の切なる思いが込められた糸。そこには、局所的な風習の域を超えて、身体が命を担うという生々しい事実とその事実への眼差しが、糸をしつける振る舞いを通じて象徴されているように思われる。

こうした歴史的事実に触れると、かけがえのない命を担う当のものとして、身体を問う重要性が改めて立ち上がってくるのではなかろうか。ところが、従来しばしば問題視されてきたように、ハイデガー思想には身体的に生きる人間への視座が欠けているように見える。もっぱら、「身体（Leib）」は注意されつつも十分に解明されず、また生命（Leben）は実存の欠如態として語られるに留まった。彼自身が哲学における事実的な生の重要性に早くから着眼し、それを「現存在（Dasein）」の分析論へ昇華させ、存在論の発端に据えたにもかかわらず、である。『存在と時間』を中心とする前期思想では、存在一般へ向かう現存在の存在と、その意味である「時間性（Zeitlichkeit）」が鮮やかに析出されたが、その反面で、身体や生命の存在、および両者の連関の具体的な考察は、基礎存在論の先にある課題として残された上、ピュシスの解釈に踏み込む後期思想に至ってもなお果たされたとはいえない。それゆえ、例えば哲学的な生命論を主張したH・ヨナスは、自然と人間を切り離し、有限な命をもつ「身体の実存」を無視して実存や死を扱ったゆえに、ハイデガーは生命一般を欠性的にしか論じ得なかったと批判したのであった。

以上のような従来 of 主要な解釈や批判に対して、近年では、T・ケッセルのように、生物論や動物論においてハイデガーの洞察を析出する果敢な応答が試みられている。また、ハイデガー身体論の研究でも、生活世界における現存在のあり方を再検討することにより、たんなる物体に還元され得ない身体の存在論的な位置づけがさまざまに議論されるようになった。

だが、発表者の見るところ、現存在自身であるはずの身体を存在論的にはどのように理解できるのかという論点は、ハイデガー自身の不十分な論述も手伝って、いまだ十分に解明されていない。何より発表者には、上述のヨナスに代表されるような批判へ応答してい

くためには、まずもって身体的に生きる現存在のあり方の存在論的な性格を解明する必要があるように思われる。

そこで本発表では、『存在と時間』や『ツォリコーン・ゼミナール』等の主要なテキストに基づいて、身体に関するハイデガーの論述の真意に迫るよう試みる。その際に手掛かりにしたいのは、後期思想で強調されるようになった「身振り (Gebärde)」という概念である。本論で明らかにするように、それは、主観の内面を伝達する手段としての「手振り (Geste)」とは異なり、言語化しようとし切れないような事象を「言うこと (Sagen)」と不可分なあり方を意味する。つまり「身振り」は、身体的なあり方だけでなく、現存在が本来言われるべき何かへ傾聴しながら応答するという言語的なあり方を指す。ただしこの語は、物を通して世界が「振る舞う (gebärden)」など、近代的な「私」の主体性を超える用法を含めて多義的に用いられており、それ自体容易には読解し難い術語でもある。

それゆえ本発表では、いくつかの新しい先行研究を踏まえつつも、自身の立場から三つの主要な論点を明らかにしていく。

第一に、「身振り」に迫る前提として、前期ハイデガーの身体に対する両義的な態度に着眼しながら、そこに潜む身体の意義を明らかにする。

第二に、「身振り」の言語性を検討することにより、「身振り」が現存在自身の生をあらわにする点を明らかにする。言い換えれば、「身振り」は、通常の言語化を拒むようなものを含めて、世界内存在しながら生きる現存在の固有な存在を担うものとして明らかになる。

第三に、現存在以外の存在者の存在を開示する「身振り」の働きを検討し、従来の主要な解釈とは異なり、現存在と他の共現存在 (Mitdasein) の関係に光を当て直す。それによって、次のような両者の相互的な関係を明らかにする。すなわち、現存在は、「身振り」によって共現存在へ自分自身の生をあらわにしながら、同時に共現存在の「身振り」からその固有な生を聞き取り、相互に関わり合うのである。

これら三点の解明を通じて、結論として、平均的で日常的な生の相互理解とは異なり、自己と他者の固有なあり方・生き方をあらわにするという「身振り」の意義を明らかにしたい。それによってまた、生命の存在を理解する展望も示されるであろう。

(以上、本文 1995 字。)